SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

長唄《勧進帳》の授業における中学生の声の評価の試み：大学生と長唄演奏家の評価の比較を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 志民, 一成, 山田, 美由紀, 本多, 佐保美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008916

〈論文〉

長唄《勧進帳》の授業における中学生の声の評価の試み

—大学生と長唄演奏家の評価の比較を通して—

志民一成*・山田美由紀**・本多佐保美***

A Study on the Evaluation of Junior High School Students' Voices in *Nagauta* class: Through the Comparison of the Evaluation by University Students and *Nagauta* Musician

Kazunari SHITAMI , Miyuki YAMADA and Sahomi HONDA

要旨

長唄《勧進帳》を歌唱した中学生の唄声について，全く長唄を唄ったことのない大学生による評価を実施し，その大学生が長唄を唄う指導を受けた後の評価と比較した。また長唄演奏家にも同様の評価をしてもらい，大学生の評価との比較も行った。さらに，これらの評価について，唄声のスペクトログラムとの分析を組合せて検討した。

キーワード　音楽授業　長唄　声の評価

はじめに

本研究は，我々がこれまでに継続的に行ってきた我が国の伝統的な歌唱，特に長唄の学校教育における指導法と教材開発研究の一環として，「長唄らしい声とはどんな声か」という問いに答えるための基礎調査を行うものである。これまでの研究においては，《新曲浦島》や《雨の四季》《勧進帳》等を教材とした検証授業を実施し，その教材としての有効性を明らかにしてきた。その検証授業を構想する過程で，「長唄らしい声とはどういう声か」ということが，つねに検討課題であり続けてきた。それは，長唄を「どのように教えるか」ということと表裏一体の問題でもある。

たとえば山内雅子（2011）は，「長唄らしい歌唱法」として，①話す声で歌っている，②音域の高低によって声を出すポジションを変えることなく，同じ場所からまっすぐに声を出している，③産み字と唄い尻をはっきりと歌う，の３点をあげている（山内 2011，p. 15）。

我々の研究では，たとえば〈船唄〉の指導において「長唄を歌うポイント」として，①声はお腹から出す，腰を入れて正座をする，②表の声を出して歌う，まっすぐに声を出す，③言葉をしゃべるように歌う，の３点を授業内に生徒に示し，長唄らしい声を模索させていった（本多・志民・山田ほか 2012，p. 223）。

本稿では，これまでの成果をふまえ，長唄の声の評価に焦点化して検討していくことにする。

１　これまでの経緯と長唄の授業実践

１）長唄の授業実践

平成 22～25 年度にかけて長唄の歌唱を中心に授業実践のための教材開発を行い，千葉大学附属小・中学校と静岡大学附属島田中学校（以下附属島田中）で《新曲浦島》の〈船唄〉の部分（平成 22・23 年度），千葉大学附属小学校と静岡大学附属浜松小学校，掛川市立西中学校，掛川市立栄川中学校，附属島田中などで《雨の四季》の〈飴売り〉の部分（平成 23～25 年度）の実践を行い，その成果を検証してきた。

今回採り上げる《勧進帳》についても，平成 24 年度に千葉市立花園中学校と千葉大学附属中学校，そして附属島田中で実践を行うなど，我々の共同研究で開発した教材を活用した授業が実施されている。（本多ら 2012, 2013）

２）《勧進帳》の授業実践

2012 年 7 月および 2013 年 2 月に静岡大学教育学部附属島田中学校において，２年生３クラスを対象とする授業を実施した。授業者は松下成輝教諭である。東音谷口之彦氏（唄）と東音山田美由紀（三味線）がゲスト・ティーチャーとして歌唱指導と鑑賞の演奏を行った。

* 静岡大学教育学部　音楽教育講座
** 千葉大学・静岡大学非常勤講師
*** 千葉大学教育学部

歌唱教材とした部分の詞章

鳴るは瀧の水
日は照るとも　①絶えずたうたりとくとく
立てや　手束弓の　心ゆるすな
関守の人々　いとま申してさらばよとて
笈をおっ取り　肩にうち掛け

②虎の尾を履(ふ)み毒蛇の

口を遁れたる心地して　陸奥の國
へぞ　下りける

《勧進帳》歌唱教材部分は，詞章に示した最後の部分「鳴るは滝の水～」の，下線部で示した①「絶えずたうたり～」および②「虎の尾を履み～」の２箇所とした。曲が最高に盛り上がる箇所であり，たたみかけるように唄うような長唄独特のことばの運びが，よく体感できると考えた。なお抜粋して２箇所に絞ったのは，他の部分は技能的に難易度が高く，またゲスト・ティーチャーの入った授業が１時間のみに限定されていたという理由から判断した。

２　調査の概要

１）調査１

先述した《勧進帳》を扱った授業において中学生が歌唱した２箇所の音源を用い，大学生対象に聴取評価実験を実施した。

［対象］長唄を唄った経験の無い教育学部音楽専攻大学１年生 32 名。

［実施時期］山田が担当する３日間の長唄の集中講義（2013 年７月実施）の履修前と授業直後の２回実施。集中講義では，該当音源と同じ部分の歌唱活動を行った。

［実験に用いた音源］2013 年２月４日，静岡大学教育学部附属島田中学校２年生２クラスで実施した《勧進帳》の歌唱指導で，男女各６名・計 12 名にワイヤレス・マイク（LINE6　XD-V3）を付けてもらい，受信した音声をマルチトラック・レコーダー（ZOOM R24）で録音した。その中から，楽曲の旋律再生という点で重大な問題が生じていない 12 サンプルを抽出し，調査用音源として利用した（Table１）。

Table１　調査に用いた中学生の唄声の音源

歌唱箇所	男子	女子	男女合計
①絶えずたうたり～	4	3	7
②虎の尾を履み～	3	2	5
合計	7	5	12

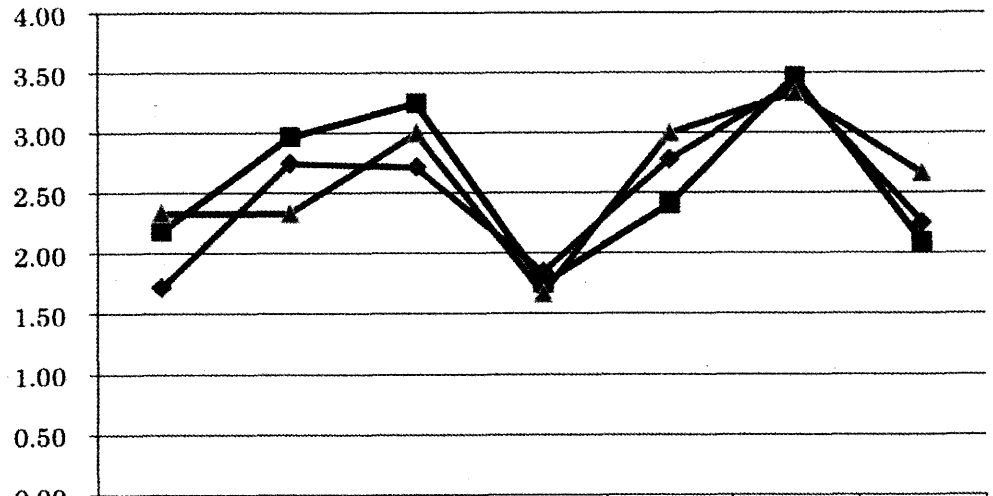
［方法］

対象学生全員に，音源を一つずつスピーカーで一斉に聴取してもらい，「長唄らしく唄えているか」という観点で，１～４（４が長唄らしい）の４段階の評価尺度で評価してもらうとともに，その理由を簡潔に自由記述してもらった。なお，１回目と２回目の実験では，聴取する音源の順番を逆にした。

２）調査２

大学生を対象とした調査１と別に，長唄の女性の唄方３名を対象に，同様の調査を 2013 年８月に実施した。音源と方法については調査１と同じだが，専

Fig.1　大学生前後―専門家比較（男子）



	1	2	3	4	5	6	7
学生１回目	1.72	2.75	2.72	1.84	2.78	3.41	2.26
学生２回目	2.19	2.97	3.25	1.75	2.41	3.47	2.09
専門家	2.33	2.33	3.00	1.67	3.00	3.33	2.67

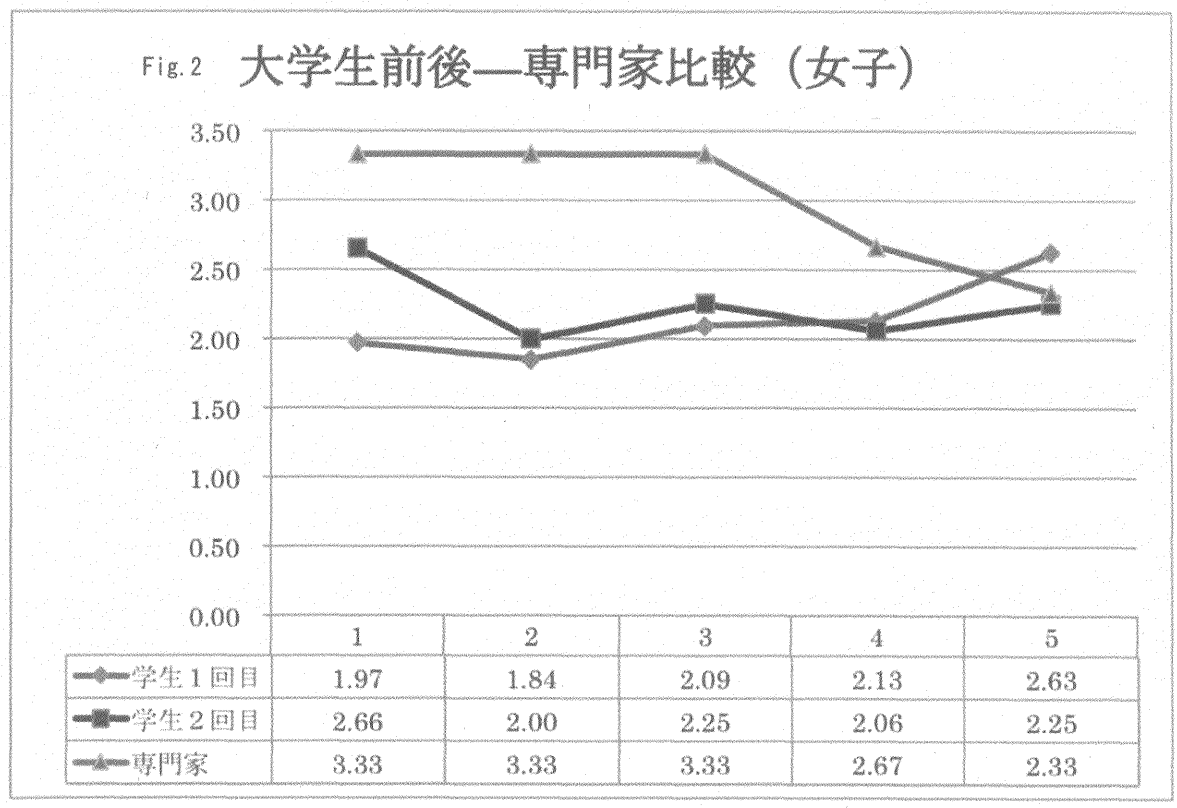
門家については，調査は１回のみ実施した。

３　調査の結果

１）評価点の分析結果

調査１で実施した集中講義前の大学生による評価の平均は 2.345 点で，集中講義後の平均は 2.449 点であった。学生被験者内で集中講義前と後の評価に変化があるかどうかについて t 検定を行ったところ，有意差が見られた（$p < .05$）。この結果と平均値を見ると，長唄の教材の歌唱を経験した後の方が，評価の得点が高くなったと解釈することができる。

次に男女の音源毎に，大学生の集中講義前後および専門家の評価の平均点を比較していくことにする。Fig.1 は男子生徒が唄った音源に対する評価の平均点で，１～４が「絶えずたうたり～」，５～７は「虎の尾を履み～」の箇所を唄った音源であるが，大学生と専門家ではかなり似た評価の傾向が見られた。一方，女子の音源（Fig.2）は，「絶えずたうたり～」の箇所を唄った１～３の音源では専門家の評価点よりも大学生の評価点が大きく下回っているが，「虎の尾を履み～」の箇所の４と５は専門家の評価点が低くなったことで，大学生の評価点と近づいているの



	1	2	3	4	5
学生１回目	1.97	1.84	2.09	2.13	2.63
学生２回目	2.66	2.00	2.25	2.06	2.25
専門家	3.33	3.33	3.33	2.67	2.33

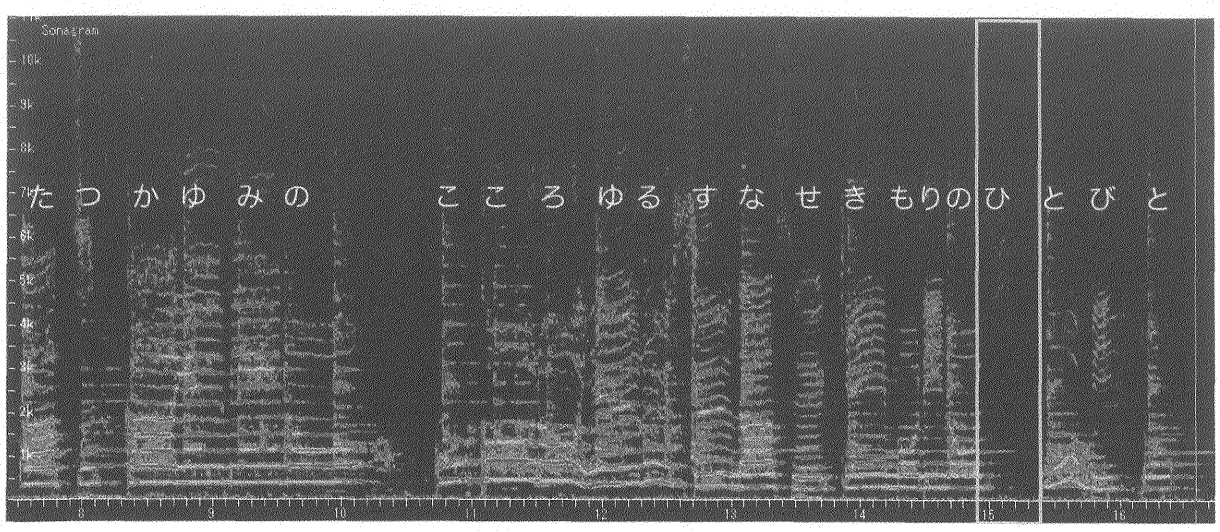


Fig.3　女子の音源１のスペクトログラム

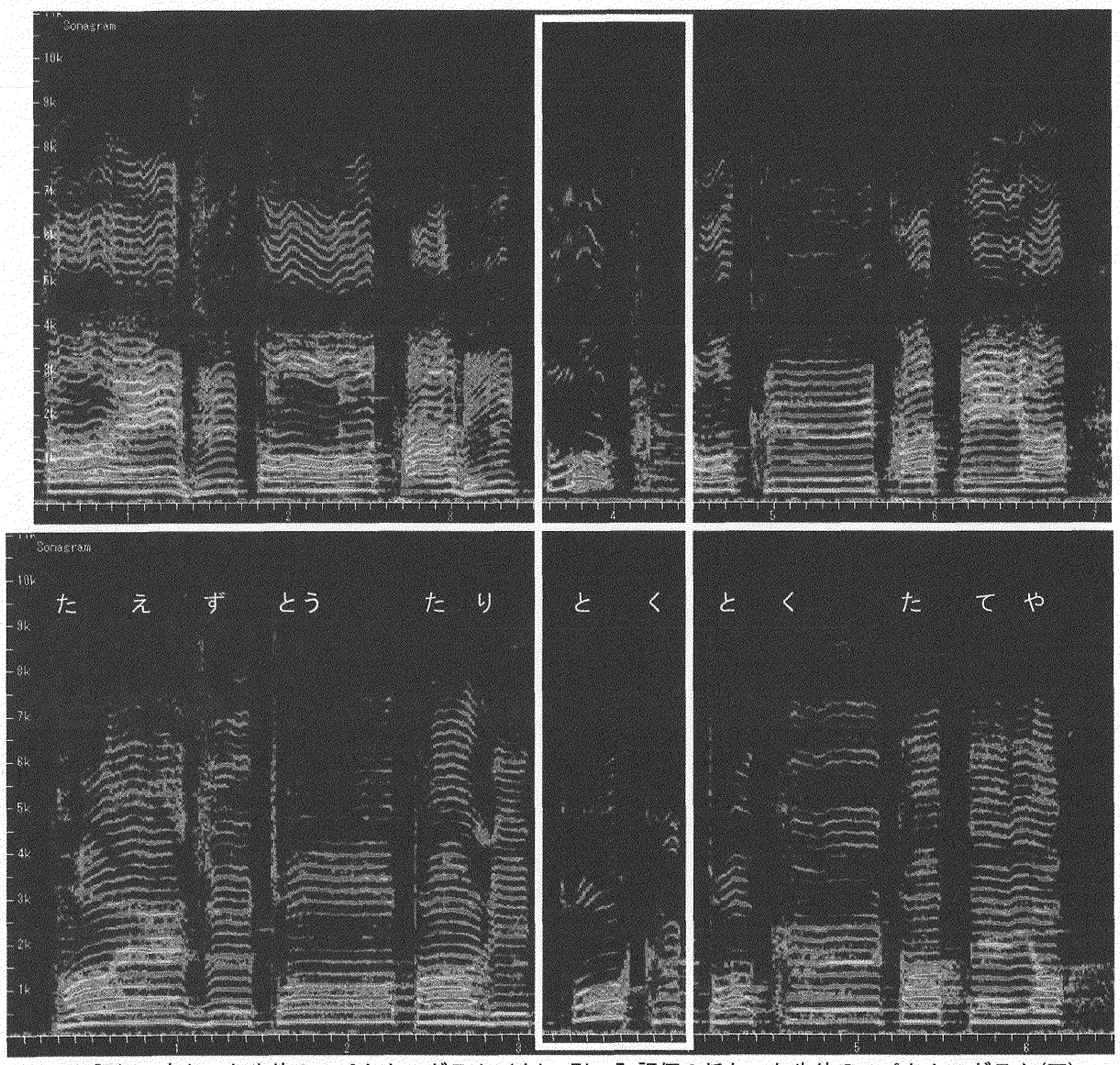


Fig.4 評価の高かった生徒のスペクトログラム（上） Fig.5 評価の低かった生徒のスペクトログラム(下)

がわかる。このことについては，次項で記述の分析と合わせて考察していくことにする。

2）自由記述と音響分析の結果

(1)大学生の記述の変化について

ここでは，大学生が長唄の集中講義を受講する前後でどのような聴き方の変化があり，評価に影響したのかを検討するため，１回目よりも２回目に評価が上がった大学生の記述を見てみることにする。Table2 は男子の音源３，Table3 は女子の音源１について，評価が上がった大学生の記述を観点別に分類したものである。

下線部で示したように，「はねあげ」などの長唄特有の唄い方や，「無声音」や「鼻濁音」などの発音といった，長唄を唄う際に配慮すべき具体的な内容についての用語が挙げられている。「跳ね上げ」は，腹筋を使い瞬時に音程を上げるとともに声を強く出す唄い方であり，この部分で言えば「とくとく」の最初の「と」の箇所で見られる。また，「無声音」については，「たつかゆみの」や「ひとびと」で出てくるが，女子の音源１のスペクトログラム[1]を見ると，「ひとびと」の箇所（Fig.3）で有声音特有の整数次倍音を示す縞模様が消えており，無声になっているのが分かる。

また，専門家と大学生のいずれにおいても最も評価の高かった男子生徒（Fig.4）と，最も評価が低かった男子生徒のスペクトログラム（Fig.5）を比較すると，評価の高い生徒は整数次倍音を示す縞模様が上下にうねるように波打っており，音程の抑揚が大きいことがわかる。特に，四角で囲った「とくとく」の部分では変化が顕著である。それに対し，評価の低い生徒は上下の動きが少ない。こういった特徴に着目することで，評価がより明確化されたものと考えられる。

Table2 男子の音源３についての記述

評価	観点	男子の音源３
評価が良くなったもの	発音・はねあげ	ラ行がらしい。無声音がちゃんと消えている。上がるところもちゃんと上がっている。
		はね上げがよい。無声音も十分できている。
		音程が不正確だが，無声音はできている。
		リズムも鼻濁音もちゃんとできている
		音程は良くないが，ルールを守った唄い方。無声音も守れている。
		とくとくの「と」がよかった
		「とくとく」の歌い方が，長唄らしい
		高い音に上がるところが長唄らしかった
		ちゃんと（左下から右上に向かう矢印）になっていて，長唄らしく感じた
	発音・はねあげ＋発声	はねあげができている。お腹から声がでている
	声・発声	最初は声にはりがあった
		しっかり声出ている
	音程	
	全体的な印象	声は裏返っているけど，雰囲気がいい
		高い音はおしいけど，全体的にそれっぽい
評価が下がったもの	発音・はねあげ＋発声	
	声・発声	
	音程	少し音程がずれてしまっていた

Table3 女子の音源１についての記述

評価	観点	女子の音源１
評価が良くなったもの	発音・はねあげ	上がるところが思い切り上がっている。無声音がちゃんと消えている。
		長唄を歌う時のポイントがしっかり意識されている。
		音程や発音はいいが，裏声の部分がある
		無声のところがよくできていた
		音の上がり方がよかった
		あがりと無音の発音がよくできていた
		「と」がよく上に抜けていてよかった
	発音・はねあげ＋発声	声も抜けていて，かつ発音もきちんとしていて上手。「とくとく」「たつかゆみの」「ひとびと」
	声・発声	
	音程	音程も比較的に良かった
	全体的な印象	まとまっている。
		長唄の雰囲気があった気がする
評価が下がったもの	発音・はねあげ＋発声	はねあげのところが声をひいてしまっている
		音程が上がるところに力が入っていないように感じた
	声・発声	雰囲気はいいけど，もっと声の張りが欲しい
	音程	

このように，長唄の集中講義を受けた後の評価では，より具体的な観点が挙げられており，全体的な印象からの評価はほとんど見られない。２回目の調査の直前に受講した集中講義で，該当箇所の歌唱のポイントとして指導されたことが，そのまま評価の観点に挙げられていることがわかる。長唄の歌唱を体験し，具体的な唄い方の指導を受けることにより，評価の観点もより明確になったと言えよう。

(2) 専門家の記述との比較

前項で触れたように，女子の音源に対する専門家の評価点が，「絶えずたうたり～」の箇所と比較して「虎の尾を履み～」では平均で 0.6 点以上低くなっていた。このことについて専門家の記述から分析を試みたい。

「絶えずたうたり～」の箇所の評価では「音程」や「リズム」が「しっかり」しているなどの記述が見られる一方（Table4），「虎の尾を履み～」の箇所についての記述では「唄い方が子供っぽい」や「口先だけで処理している」といった内容が見られる（Table5）。

Table4「絶えずたうたり～」の専門家の記述

音源	評価者	評価の理由
1	A	発声がゆるい。リズムは良くとれている
	B	はっきり唄っていて何を言っているかわかる
	C	音程もリズムも良くとれている。長唄の発声になるともっと良くなると思う。
2	A	リズムにのって唄えているが音で唄ってしまっている。
	B	旋律を音程でしっかりとって唄っている
	C	長唄の発声に少しでもなると良くなる
3	A	リズムはとれているが長唄独特のテクニックを音で表現してしまっている
	B	旋律と邦楽特有の言葉のはねあげかたをとらえている
	C	音程が安定している

Table5「虎の尾を履み～」の専門家の記述

音源	評価者	評価の理由
1	A	声が大きいのは良い。全体に言えるが，ながれたるの「が」が鼻濁音になっていない
	B	旋律の音程はきちんととれているが，鼻濁音ができていない
	C	唄い方が子供っぽい
2	A	声が小さい
	B	全体的に不安定で口先だけで処理している
	C	唄えてはいるが，もう少し抑揚があると良い

「絶えずたうたり～」の箇所は比較的細かい旋律的な音高の動きがあるが，「虎の尾を履み～」の箇所は旋律的な音高の動きは少ないものの，跳ね上げなど長唄特有のダイナミックな表現がより求められると言えよう。それゆえ，力強さに欠け，西洋的な音高の捉え方をする傾向にあった女子について，「虎の尾を履み～」の箇所の評価が厳しくなったと推測することができよう。このように同じ長唄の歌唱教材であっても，歌唱する箇所の特質によって，評価が左右される可能性が示唆されよう。

4　まとめと今後の課題

本研究では，大学生が当該教材を唄う経験をし，長唄の専門家から唄い方の指導を受けた後，中学生の唄う音源に対する評価点が有意に高くなった。また評価の観点についても，漠然とした全体的な評価ではなく，長唄特有の特徴からの観点が加えられたことがわかった。そのことで，これらのポイントを踏まえて唄っている音源に対して，高い評価をするようになったと推察される。

同じ長唄でも唄う部分によって，それにふさわしい唄い方や声も変わるということは言うまでもないが，評価の観点が多様化することで，特徴を捉えた歌唱に対して，より正当な評価が可能になると考えられる。

今後の課題としては，以下の点が挙げられる。すでに述べたように，教材として採り上げる楽曲や部分によって，唄い方や声の使い方に異なった特徴があり，一概に「長唄らしい声」という基準は規定しにくい。今回採り上げた部分は《勧進帳》のなかでも特にダイナミックな表現が求められることもあり，他の長唄の唄い方に一般化できるものではないと言える。

しかし，単に「声が良く出ている」といったような漠然とした評価ではなく，唄われる教材の特徴を捉えた評価のあり方を検討していく必要があるのではないかと考える。

［付記］本稿は，平成 25（2013）年 10 月 12 日に弘前大学で開催された第 44 回日本音楽教育学会大会における口頭発表「長唄《勧進帳》の授業における 中学生の声の評価の試み ―『長唄らしさ』を焦点に―」の内容の一部をもとに，大幅に加筆したものである。

註

1) スペクトログラムとは，スペクトル（ある時点の音声波形を周波数ごとの音の強さに変換したもの）の時間変化を表示できるようにしたものである。

引用および参考文献

・嶋田由美（2013）「『よく聴く』・『まねる』一学生による「勧進帳」の自学自習から長唄の指導法を考える一」『学校音楽教育研究』日本学校音楽教育実践学会。

・本多佐保美・志民一成・山田美由紀（2012）「日本伝統音楽の声に着目した指導法と教材開発研究：長唄《新曲浦島》の指導を例に」日本教育大学協会『日本教育大学協会研究年報　第30集』。

・本多佐保美・山田美由紀・志民一成（2013）『我が国の伝統音楽の指導法および教材化研究～長唄の表現活動と鑑賞との関連を軸に～　音楽教育研究報告第28号』音楽鑑賞振興財団。

・山内雅子（2011）「小学校における日本の伝統的な歌唱の指導に関する研究　――一般的な音楽教師が可能な長唄の指導法」『音楽教育学』第41巻第1号，pp. 11-23。